

教派神道の 教祖と 儀礼

教派神道とは

教派神道とは、明治時代の宗教政策の中で、「神道教派」として政府から公認された神道教団等を指す用語である。

明治時代の末には13の教派があったことから、「神道十三派」という言い方がされた。この多くは、幕末から明治時代にかけて生まれた神道系の民衆宗教が基盤になっている。教派神道の連合組織である教派神道連合会は、明治28（1895）年に「神道同志会」の名称で結成され、平成27年は、この結成から120年目に当たる。「神道同志会」以降、退会、加盟などを経て、現在、この連合会には出雲大社教・大本・御嶽教・黒住教・金光教・実行教・神習教・神道修成派・神道大教・神理教・神道扶桑教・稷教が加盟している。

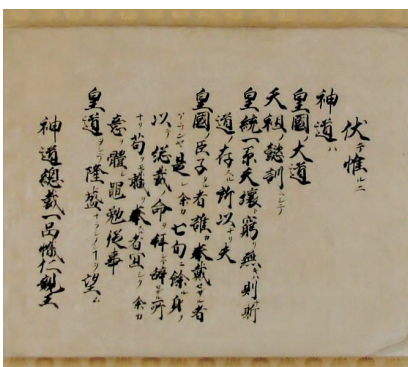
趣旨

國學院大學は、明治15（1882）年に設立された皇典講究所を出発点とする。皇典講究所の草創期に関わった人々は、初代総裁・有栖川宮熾仁親王をはじめとして教派神道にも関与し、特に宍野半や神崎一作は教派神道の形成や展開にも強く関わっている。また、昭和24（1949）年より教派神道連合会の委託を受けて國學院大學は「神道講座」を開講し、神道や宗教に関する知識を教えていた。この講座は同41年を最後に中断していたが、本年6月より、この講座が再開されることとなった。國學院大學博物館では、これらを記念して企画展「教派神道の教祖と儀礼」を開催し、本学所蔵及び教派神道連合会所属教団より借用した教祖ゆかりの品々や儀式で用いられる道具を展示することとした。



皇典講究所・旧飯田町校舎

草創期の教派神道と國學院大學



令旨（有栖川宮熾仁親王）〔神道大教〕

と、「宗教」としての「教派神道」へ分離した。これにより神道事務局は後に神道大教となり、また、現在の出雲大社教ほか、多くの教派神道が神道事務局から別派特立（独立）していくこととなる。

教派神道の形成

明治5（1872）年に明治政府は、国民教化を目的とする教導職制度を実施し、神官と僧侶を教導職に補任して神仏合同による教化活動を展開した。しかし、この神仏合同布教は、明治8年に解消されることとなった。同年に、神官を中心とする神道教導職の拠点として神道事務局が設立され、明治14年には神道教導職の総裁に有栖川宮熾仁親王を推戴することとなった。その翌年、神道教導職の国民教化の不振を見た政府は、神官と教導職を分離し、明治初年以來の「神道」を、法制上「非宗教」とされた「神社神道」



辞令（明治6年、大講義、新田邦光）〔神道修成派〕

教派神道と草創期の皇典講究所

神官と教導職が分離されると、宍野半・平山省斎といった教派神道にも関わる人々と井上頼圀・松野勇雄をはじめとする国学者達は、神官・教導職を養成していた神道事務局生徒寮を発展的に解消し、皇典講究所を設立した。そして、神道教導職総裁であった有栖川宮熈仁親王を初代総裁に推戴する。

新たに設立された皇典講究所は、神道精神に基づく研究・教育を志向する人材養成機関であり、国学的研究を基盤としながらも「神社神道」だけではなく、「教派神道」界にも神崎一作(神道大教)をはじめ多くの人物を輩出した。このように皇典講究所及び國學院大學は、近代以降現代に至るまで人材養成を通して「神社神道」と「教派神道」の結び目としての役割を果たしているのである。



宍野半〔神道扶桑教〕

教派神道の諸儀礼



日拝〔黒住教〕

教派神道の多くは、幕末段階で、それぞれの組織や、その母体・源流とも言えるものが存在しており、また組織化の過程で、様々な信仰集団を取り込んでいった。このため、「教派神道」という言葉で括っても、その成立・展開の過程は様々である。さらに、そこで行われている儀礼(祭式や行法)、活動、そして、そこで用いられる祭具を含めた道具や装束もそれぞれに特色を持っている。儀礼の中には、教祖(創始者)の体験や経歴、思想などに基づくもの、母体・源流となった組織で行っていた儀礼を引き継ぐもの、教団の展開の過程で新たに創出されたものなど様々である。一方で、教団の形成・展開の過程で、神社祭式も導入していった。

十種神宝御法火祥神事〔禊教〕



御取次〔金光教〕



祓修行〔禊教〕

石笛を奏じる様子〔神習教〕

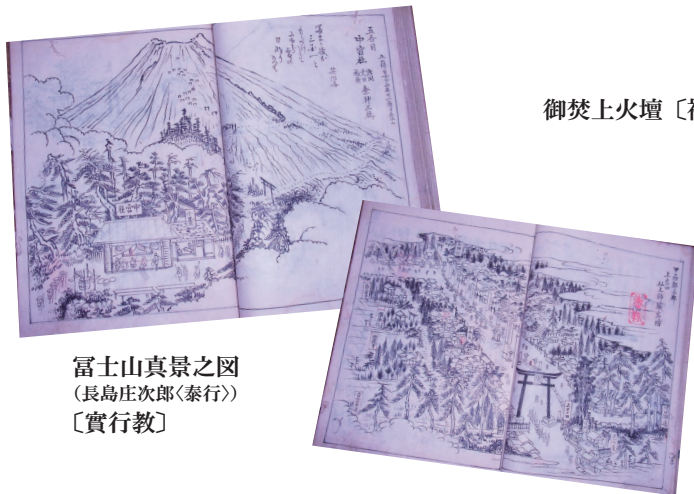


十種神宝〔神習教〕



教派神道と山岳信仰

教派神道の中には、近世から続く山岳信仰を取り入れたり、その講組織をまとめたりして形成されたものがある。この中には、江戸時代に行われていた木曾御嶽山に対する信仰を基盤とする御嶽講、富士山を信仰する富士講があった。御嶽講の大半は御嶽教となるが、一部の御嶽講は、神道修成派、神習教の教団組織が形成される過程で、それらに組み込まれた。富士講は実行教や神道扶桑教の母体となった。御嶽教、実行教、神道扶桑教といった山岳信仰系の教団は、その母体となった各講が持っていた信仰や儀礼を受け継ぐと同時に、神社神道と共通する祭式も行っている。



富士山真景之図
(長島庄次郎<泰行>)
〔実行教〕

御焚上火壇〔神道扶桑教〕



法具〔御嶽教〕

敷曼荼羅〔御嶽教〕



神葬祭

神葬祭は、仏教の形式ではなく、神道の形式で行う葬儀のことである。江戸時代においては、神職と、その嫡子以外は、これを行なうことが許されていなかったが、明治元(1868)年に許された。しかし、明治15(1882)年に神官と教導職が分離されると、官国幣社と呼ばれる主要な神社の神官は、葬儀に関与することができなくなった。一方で神道教派(教派神道)の人々は、これを行うことができた。このため、各教派は独自に神葬祭の次第や作法(神葬祭式)を確立していくこととなる。このうち、千家尊福によって組織化された出雲大社



神葬祭祭具〔出雲大社教〕

教は、早い段階で神葬祭式を確立している。これは、出雲大社教が出雲大社に対する信仰を基盤としつつ、大国主神が幽冥界を司るという教義を形成していたことによる。同教団は、明治12年には神葬祭の祭式を記した『葬祭式』の原本を作り、同14年に出版している。同書は、社会の変化等に対応して改訂を加えつつも、現在まで用いられている。



千家尊福〔出雲大社教〕

教派神道の

教祖（創始者）たち

教派神道各教団の形成過程は様々であり、それを創始した人物（創始者）を一概に新たな宗教伝統を創りだした人物を意味する「教祖」と呼んでよいかどうかは、注意を要する。教派神道を含む、明治以



黒住宗忠〔黒住教〕

降の神道系の宗教運動について、ゆるやかに分類するならば、神道修成派、神理教、神習教のように神社神道や近世の国学・復古神道によって築かれた思想と深く関わりながら展開した教団、大本や金光教のように独自の要素が強い教団、あるいは黒住教や禊教のように創始者が、それまでの神道の影響を受けながらも独自の要素を加えた教団などがある。このうち、独自の要素の強い教団においては、創始者の「教祖」としての性格は顕著になるが、「神社神道」と共通する神道史の展開からは距離を置くこととなる。しかし、どのタイプにせよ、教祖（創始者）の経歴や体験、

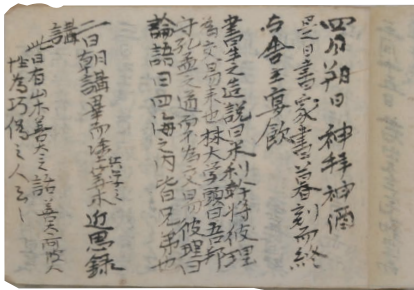
活動、あるいはその思想が、教派神道各教団の教学や組織の形成において重要な位置を占めていることは間違いなく、それが各教団の特色を作り出しているといえる。



佐野経彦〔神理教〕



出口なお〔大本〕



備忘録三（嘉永3年力、新田邦光）
〔神道修成派〕

戦後の教派神道と

國學院大學

皇典講究所及び國學院大學は、教派神道に関わる人物を多数輩出していた。

しかし、あくまで神社神道の神職を養成する機関であり、厳密には教派神道

の教師を養成する機関ではなかった。戦後になると、昭和24（1949）年より同41年まで、教派神道連合会の委託によって國學院大學は「神道講座」を開催した。これは、戦前においては日本大学で行われていたものである。本学での神道講座は、教化に必要となる知識、神職養成に際して必要とされた神道の知識と祭式を提供していた。

【主要参考文献】

- ・井上順孝『教派神道の形成』（弘文堂、平成3年）
- ・中山郁『修験と神道のあいだ—木曾御嶽信仰の近世・近代—』（弘文堂、平成19年）
- ・中山郁「國學院大學と教派神道—教派神道連合会「神道講座」・御嶽教「地方教学院」の事例から—」（國學院大學研究開発推進センター編『史料から見た神道—國學院大學の学術資産を中心に—』弘文堂、平成21年）

執筆：大東敬明・武田幸也（國學院大學研究開発推進機構）
監修：井上順孝（國學院大學研究開発推進機構長）
中山郁（國學院大學教育開発推進機構准教授）
編集：陣内理良（國學院大學博物館学芸員）

企画展

「教派神道の教祖と儀礼」

会期：平成27（2015）年 6月1日（月）～30日（火）

主催：國學院大學博物館、教派神道連合会

会場：國學院大學博物館 企画展示室

〒150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28

TEL 03-5466-0359 <http://www.kokugakuin.ac.jp>

写真提供：教派神道連合会所属教団